序にかえて

理事長　蒲原　宏

ヨーロッパ、アメリカの大学、博物館を廻ってみると、医学に関係する資料を後世に伝えようとするために大きな努力がその国なりに行われていることを知る。

狭い意味での医学史関係の資料――これを医史料と称しているが――はまことに多種多様であり、これを後世に遺すことは大変な努力と膨大な物理的・経済的な負担を覚悟しなければならない。日本ではその努力を怠ってきた。

医学の歴史研究そのものが、医学における他の分野の研究と異なり、その成果はそのほとんど全てが抽象知の生産のみで、具体的に、即効性も即物性もなく、目にはっきりと見えぬものばかりである。医史料への無関心の根元がそこにある。過去の歴史を知ることは、未来を想定して現在を改善していくことであると思う。

従って、その研究の基礎となる書籍――刊本・写本であろうと、ほとんど医学発展の残渣にしか見えぬものとして、書庫に埋れるか、廃棄されていたのが各医療機関、医学教育施設での実態であった。

このままで推移すれば日本の医療関係の人々が営々として蓄積してきた知的遺産の原資料が消滅・風化してしまう。人類の遺産への冒瀆的な行為として世界の嘲笑をさへ招きかねない。

二十世紀末に至った現在、幸いなことに心ある医薬関係機関、教育研究施設において、今まで顧慮されることのほとんどなかった、これらの医学史資料についての整理・保存・展示・公開がようやく行われるようになった。

しかし、その所在、資料目録の整理、保存管理法及びそれを利用しての研究は、二十一世紀での開花が期待されなければならぬ現況である。

日本の医学研究で最も遅れているこれらの問題を憂慮し、日本医史学会は、平成十年五月函館市における第九十九回日本医史学会総会のシンポジウムの一つに「日本における医史料の蒐集と保存について――その現状と提言」を設定し、寺畑喜朔金沢医科大学名誉教授の司会の下に、酒井シヅ順天堂大学教授、中山沃岡山大学名誉教授をシンポジストとし、二時間余にわたる報告と討論をおこないその具体的な将来への展開・実施策についての数多くの有益な発言、助言が得られたのである。

学会長の松木明知弘前大学教授の医学部図書館保存の文庫等の概況調査報告の結果をはじめ、医史料の文化史的重要性を医学界の各方面の有識者にしっかりと認識していただくために、このシンポジウムの内容を冊子にまとめて刊行することを司会者が提案し、ここに実現することとなった。大変嬉しいことであり、斯学のためまた有り難いことである。

この冊子の刊行によって、医育・医療機関は勿論のこと、個人の資料所蔵の如何にあるべきか、その分類、整理、保存、利用についての在り方が問い直され、延いては新史料の発見、埋没していた先人の業績が世に紹介され、また是が非となり、非が是となることが証されることになるならば、医の世界に生きる人々に活力が与えられることになる。

前野良沢ではないが、この医史学研究の基礎的な仕事と努力は一見「天下無用の学」と考えられがちである。

目下の流行におし流されずに行われている地味な仕事は、将来において必ず偉大な文化的な仕事として見直される。

本冊子は医史料の蒐集と保存への警鐘だけでなく人類の知の遺産を守る精神の重要さを具体的に示しているものであり、その刊行の意義は甚だ大きなものであると信じている。

なお本冊子には総会後、横浜での九月例会においておこなわれたミニシンポジウムの発言もあわせて収録した。